Rio

豊田市矢作川研究所　月報

◆矢作川の甲虫たち
◆矢作川の植物の楽しみ方
◆第 10 回 矢作川学校ミニシンポジウム
◆ 2014 年 矢作川「川会議」のご案内
◆退任あいさつ

4
2014
No.184

豊田市矢作川研究所　〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860　FAX 0565-34-6028　e-mail yahagi@yahagigawa.jp　URL http://yahagigawa.jp

矢作川の甲虫たち

戸田　尚希

甲虫というと、まず誰でも名前が浮かぶのはカブトムシやクワガタムシという名前ではないだろうか。これらの様な代表的な“大型種”であれば、他にゲンゴロウやカナブンなどの名前もあがるかもしれない、割と知られたグループである。この甲虫の仲間は、愛知県にはざっと三千を超える種が棲息していると言うと驚かれるであろうか。先に“大型種”と書いたのは、実はそのほとんどが 5mm にも満たない大きさだからである。1cm を超えると「まあまあ大きい種」などと表現されることもしばしばあり、観察にはルーペや顕微鏡が必須となる。

チョウ類などと違い、飛ぶことを主としないこの甲虫という虫たちは、湿度に結構なこだわりを持つ仲間でもある。乾燥した砂地が好きな甲虫、ベチャベチャに湿った枯れ葉の下が好きな甲虫、ひいては水の中に棲む甲虫など、環境に対する好き嫌いはかなり激しい。

水に関係した虫としても有名な甲虫である“ゲンゴロウ”は、実は池などの止水域（水の流れがない場所）に棲息する種で、矢作川の流れの中にはいない。ただ、この“ゲンゴロウ”が属するゲンゴロウ科の甲虫となると話は違う。矢作川では流水性（水の流れがある場所にいる）のモンキマメゲンゴロウを、本流の岸辺付近から山地渓流のよどみまで見ることができる。黒っぽい背中に黄色い紋を幾つか背負い、愛くるしくもすばしっこく泳ぎ回っている。

モンキマメゲンゴロウ

やはり 1cm にも満たない甲虫であるが、ちゃんと背中に空気を貯めて水中で活動する立派なゲンゴロウの仲間である。水深の浅い場所に棲んでいるので、街中のコンクリート護岸が進んだ河川では生息環境は減る一方であるが、矢作川ではまだ多く見ることができる。

中流域で、まあまあ大きい美麗種の代表はエサキキンヘリタマムシであろうか。成虫のメタリックグリーンの背中には黒い星が散布され、その縁はオレンジ色に輝いている。昆虫愛好家仲間にはたいへん人気のある甲虫である。卵はヤナギ類に生み付けることが知られているが、矢作川では幼虫はネコヤナギの衰弱部から見いだされる。成虫は５月から６月に、河川敷のカワラハンノキやヤマハンノキの葉をかじる。山間部でも見られる虫ではあるが、発生地である河川敷では年による増減が著しい。これは大雨などにより、河川が増水撹乱しネコヤナギが痛めつけられるため、加害する虫への抵抗力が落ち、結果としてこのタマムシの繁殖にとって好条件となるためであろう。

上流域の砂地にはアイヌハンミョウや、それより少

エサキキンヘリタマムシ　撮影：蟹江昇氏

左 コニワハンミョウ　右 アイヌハンミョウ

し小さめのコニワハンミョウが見られる。ハンミョウの仲間は目が大きく、大顎もよく発達した肉食の虫である。「道教え」という別名を持つとおり、人の気配がすると３～４ｍほど先へ飛んでまた地面にとまる。砂地にいるこの２種とも艶消しの深緑に乳白色の唐草模様に似た模様があり、羽を開くと見えるメタリックグリーンは太陽の光に輝くと見とれてしまう。

最後に、やはりルーペの必要な世界の甲虫を紹介したい。矢作川には、河川敷の小石の間や砂地に 5mm 前後の大きさの種類が多いミズギワゴミムシの仲間がたくさん棲息している。春から夏にかけて、天気の良い日に小石のある砂地の水際にしゃがみ込むと、この小さなゴミムシ達がワラワラと走り石の下などに隠れる。背中に斑紋のある種類も多く、手で石をどけてやるとまた走りまわり、中には飛んで逃げていく個体もあるので見ていて飽きない。この様な場所では、小さなハエの仲間の幼虫などが湧いており、それを食べているものと思われる。

左上 ウスモンミズギワゴミムシ
右上 キアシルリミズギワゴミムシ
左下 オオフタモンミズギワゴミムシ
右下 キモンナガミズギワゴミムシ

このミズギワゴミムシ類の様に、多様なちいさなちいさな甲虫たちが、矢作川の河川敷には棲んでいるのである。今度河辺に行くときにはぜひ目を凝らしてその世界を探してみませんか？

（とだ　なおき、名古屋昆虫同好会）

矢作川の植物の楽しみ方

山本　博美

私の故郷は、奥浜名都田川です。スズキやボラ、タイの仲間までが遡上し、冬には沢山のカモ達が浮かぶ下流域を遊び場として育ちました。矢作川中流域に移り住んだ当初は、大物の魚も見えず、河原も少なく、あまり興味が湧く川と感じませんでした。しかし、豊田で植物が大好きな仲間達と出会い、時に川沿いの植物達を観察するようになった途端、何故か矢作川の持つ面白さに目覚めてしまいました。今回、私流の植物の生活を通した、矢作川の楽しみ方を書いてみたいと思います。

矢作川の源流部は信州の大川入山です。重力の法則に逆らい標高 1907 ｍの高さまで登るのはとても大変ですが、豊田では見る事の出来ない亜高山針葉樹林の仲間（コメツガ・トウヒなど）も見る事が出来、見晴らしも良く素晴らしい山です。

中流域上部は、豊田市に入り最も面白い所です。ぜひ見てもらいたいのは、早春、濃いえんじ色の房状の花が咲く樹木です。川の崖っぷちだけに生えています。

ニリンソウ

フサザクラという名前ですが、桜の仲間ではありません。中学校で習った導管（水を上げる管）という組織がなく、その代り仮導管という変わった方式で水を上げている、形態的に古いタイプの変わり種です。旧旭町の矢作川沿いの道路からでも簡単に見ることが出来ます。

川の向こう岸の岸壁に、白や朱の花の帯が見られる事があります。白は４月頃咲き乱れるユキヤナギ、朱は５月過ぎに咲くサツキです。家や公園で見なれた植物の本来の生息地は川岸の崖なのです。岩の隙間に根をぐいっと食い込ませて急な川の増水にも耐えています（ユキヤナギの、あのしなやかな枝も川向きですね）。気を付けて見れば、川の岩場が大好きな他の渓流植物（ケイリュウタチツボスミレ・カワラハンノキ・ヤシャゼンマイ・ダイモンジソウなど）も見る事が出来ます。

川は時として、上流から色々な植物も運んできます。そして　根付く時もあります。ヘーゼルナッツというチョコレートに入っているナッツは御存知ですか？これはセイヨウハシバミという植物ですが、これの仲間が日本にもあり、日本産も勿論、美味しく食べることが出来ます。ハシバミやツノハシバミ（実が面白い）という植物です。２月初旬には、もう雄花が長く垂れ、既に咲く準備をしていました。黄色の組みひもの様な花が咲き、風で花粉を飛ばすハンノキの仲間です。春本番には、スミレという名前でも、いつもの見なれたスミレとは一味違った、とてもひかえめで上品なヒカゲスミレも咲きます。これらは、種や実が矢作川上流部から流れてきた植物です。

矢作川は、ほかにも美味しいプレゼントも運んできます。平戸橋付近には、オニグルミが上流からドンブラコと浮いて流れ、流れ着いた場所で生えています。「川の流れは植物の流れ」です。豊田の誇るＢ級グルメ、五平餅の材料としても使われ、最近「若返りナッツとしても有名になり、秋の観察会では木槌で割って食べました。豊田の木『ケヤキ』の仲間のムクノキ・エノキも沢山生えています。実も甘くて美味しく、昨年、私はたぶんムクドリより先に美味しくいただきました。

五輪花とも呼ばれるレンプクソウ（連福草）というおめでたい名前の花も非常に減りはしましたが、今でも探せば少しあるようです（話題のオリンピックとは何の関係はなし、花といっても綺麗ではなく、何しろ変わった花です）。

市街地近くでも面白い植物が見られます。春、お釣土場（越戸町）には、これも上流部から流れて来たニリンソウが一面咲きます。昔は少なかったのですが、地元の方の下草刈りなどの保護活動により増えてきています。サトイモの仲間でウラシマソウという釣竿を垂らした、こんにゃくの様な花も咲きます。貯木場跡（扶桑町）にはタコノアシという名前も形も面白い、珍しい植物があります。秋は茹でダコのごとく赤く色づきます。晩秋に見に行きましたが、ちょうど草刈りが入り刈り残された後で、残り一本を見ることが出来ました（去年、違う場所で沢山見つかりましたが、残念なことに昨年秋の大水により流されたようです）。これからまた増えてくれる事を願っています。

タコノアシ

河原といえばカワラナデシコが思いつきますが、今は河原では見ることが出来ないと思います（本来、河原というより、田の周りの様な明るい草地が大好きな植物です）。矢作川は今、竹や雑木に覆われた河原が多くなってきているので、これらの明るい所が大好きな植物達は生えることは出来なくなってきています。このままの河原の状態では、ますます人間となじみのある植物は、遠のいて行ってしまう気もします。

（やまもと　ひろみ、豊田植物友の会・自然観察指導員）

ウラシマソウ

▶第10回 矢作川学校ミニシンポジウム

3月1日、豊田産業文化センターで開催されたミニシンポジウムでは、12題の発表がありました。中学生で発表した米津勇輝くんは、「矢作川の不思議を調べる」と題し、サイエンスパートナーシッププログラム（大学・研究機関等と連携した探求活動）に取り組んでいる2つの高校に取材した内容や身近で最大の河川である矢作川で採取した生物について発表をしてくれました。高校生の部では、毎年参加してくれている愛知県豊田東高校と今回初の名古屋経済大学高蔵高校の皆さんによる発表がありました。

大学生・大学院生の部では、矢作川の水質、底生動物やその生息場となる河道形状に関する発表、淡水産貝類、外来生物のカメおよびアメリカザリガニに着目した発表がありました。

ミニシンポジウムの課題に、大人による質問が多く、若い人達の意見交換が進まないことがあります。今年はこの点を改善しようと、質問だけではなく意見や感想も含めて発言をお願いしたところ、思いの外、活発な意見交換が展開しました。研究は発表内容に様々な意見をもらってこそステップアップし磨かれます。その過程を楽しんでいただくことが主催側の1つの想いです。なお、発表タイトルは矢作川研究所のホームページ（http://yahagigawa.jp/）をご覧下さい。　（内田　朝子）

2014年 矢作川「川会議」のご案内

矢作川の日
（5月の第2土曜日）

◆開 催 日：2014年5月10日（土）　13：30～
◆開催場所：矢作川　古鼡水辺公園
※詳細については、来月号でご紹介いたします。

研究所での一年間　― お別れにあたって ―

1年間の研修期間も瞬く間に過ぎてしまいました。研究所に来ることが決まるまで、矢作川がどんな川かほとんど知りませんでした。研修をとおして、矢作川が色々な問題を抱えていることを知り、驚くと共に多くの人々が川と向き合い調査研究が進められていることを実感しました。また、豊田市という行政組織の一員でありながら、研究所には住民の方が気軽に出入りされ、普通の市役所より一歩も二歩も身近な存在なのが特徴だと感じました。これからも、変わらず住民と行政との架け橋になってもらいたいです。

短い期間ではありましたが、皆様から多くのことを勉強させて頂き、ありがとうございました。長久手市に戻っても研究所で体験したことを活かして、しっかりと川と向き合っていきたいと思います。　（加藤　直貴）

後記

「DNA解析には長けていてもその実物には疎い」と言う生物系若手研究者が増えていると言われます。調査研究活動も室内でやることが多いですが、生き物は野外現場で生きている事を忘れがちです。今回は、普段知っていると思っていても意外と知られていない生き物の側面に視点を当てた記事を掲載しました。「観察すること」がはじめの一歩であると思います。これからも野外に大いに出て、知られざる生き物の世界を見ていきたいと思っています。（間）

R100 再生紙を使用しています